

比べると価格はわずかに安く、効力は良いのである。そして山村ではエキ病による惨害でひどい目に遇っているため、谷間の水を汲み上げて液剤の撒布を励行したのであつた。この点について、吾々は粉剤を使用すれば能率的な点と労力を節減できる利点を考えたのであるが、これは実態のつかみ方が不備だつた結果となつた。

その一方、平坦部では水にはこまらないという利点はあるにしても、田植えや麦刈りなどの作業が重なるために、手数のかかる液剤撒布はきらい、手つとり早い粉剤使用が普及してしまう結果となつて、吾々の立案とは全く逆なことが現出したのであつた。

このように、ただ、試験成績と、常識的な判断によ

つておし進めようとするのは、はじめから逆コースにぶつかるようなこともあるわけで、農家の慣行実態とその土地に住む村民性とでもいつたものをよく知つて、それに合わせた判断を行わないと、いかにきれいにスジミチの立つたようにみえる技術でも普及方針を狂わせてしまうものである。純技術的な面に於ても、まず被害実態をとらえることが先決で、防除の面からは耕種的な肥培管理を通して作物の一生を熟知し、最も収量を左右する時期と病虫害の発生環境とおさえ、それに合致するように除害作戦を組み立てるべきものと考えられる。技術の普及場面では、実態のつかみ方に問題がある——ということを痛感している次第である。

原因の確認が更生の基礎

—カキ園の荒廃を救う—

石橋謙吉

(福井県坂井地区農業改良普及事務所)

福井県坂井郡芦原町佛徳寺に20町歩のカキ園があり、富有が植えられている。いまから25年前にあたる昭和5年に、約370本が植えつけられ、当時の試験場技師によつて引つづき熱心な指導をうけたので、7～8年後には立派なカキ園を形成し、昭和11年12年ごろには満州にまでも輸出したほどであつた。ところが、それほどのカキ園も、戦時に入つて、肥料は統制され、農薬その他資材の入手は困難となつたので、いきおい園の管理も行われなくなつてきた。そのため、タンソ(炭疽)病やラクヨウ(落葉)病、カキヘタムシなどがふえてそれらの巣窟のようになり、ついには荒廃して、1昨年までの15年間には1度も結実をみないというひどい変りようになってしまった。そのために、部落の人たちは園を廃棄しようと思ひ、昭和28年には120本を伐採してしまつたのである。私はその年の6月に赴任した。そして、このカキ園の生い立ちを聞き、結実しない原因を究明しようとし、とりあえず伐採を中止してもらい、くわしい調査をしようと同約した。それ以来、秋までの間に数回現地調査を行つた結果、結実しない原因として次の3点をつかむことができた。即ち、

1. 授粉樹がないということ。

2. 肥培管理が殆んど行われていないこと、特に、剪定整枝と施肥の関係が甚しく不合理であること。

3. ラクヨウ病、タンソ病、ヘタムシなどの病虫害が極めて多発していること。

がそれである。そこで、これらの調査結果を部落の人々に説明するとともに更生策を相談しその賛同を得たので、翌29年2月には塚本技師を招いて部落座談会を開き、さらに綿密な現状調査を行つて不結実の原因を一層確実に認識し、直ちに次の対策を樹立した。

1. 推肥 200貫、金肥の3要素をそれぞれ2貫づつ施肥すること。

2. 剪定整枝は3月中旬に終らせること。

3. 病虫害防除のため3月に石灰硫黄合剤、6月中・下旬に硫酸鉛加用過石灰ボルドウ液、7月上旬に過石灰ボルドウ液撒布を励行すること。

4. 6月上旬中、約1週間に亘つて人工授粉を行うこと。

5. 1結果枝に1箇を標準として摘果を行うこと。

以上の計画にもとづいて部落では真剣な実行がなされたのであるが、計画初年度に於てすでに1樹当りの平均収量は、大果(50匁以上のもの)6貫、中果(40匁以上のもの)3貫、小果(40匁以下のもの)6貫をあげ

ることができ、販売価格も貫当り105円から130円で、良質のものは150円にまで販売された。この実地指導に特に苦心したものは人工授粉であつたが、これが病虫害特にラクヨウ病の一掃とともに産園振興の最大原

因を造つたように思われる。昨昭和30年には、この施策が殆んど全園に行きわたり、一層着実な成功をおさめつつあるのはよろこばしいかぎりである。

特産地を襲う戦後の障害波と闘う

—ウメのヨクテン病対策—

重 兼 治

(福井県三方地区農業改良普及事務所)

福井県三方郡三方町西田のウメは全国的にひろく知られているもので、およそ90年も前からこの地方の南面傾斜地を利用して約40町歩が栽培されている。この生産は年量の最高は10万貫で、平均7~8万貫をあげ、西田の農業経営上重要なものとされている。作られている品種は剣先、紅映の2種類であるが、そのうち紅映はヨクテン(黒点)病に弱い欠点をもっている。この病害は約40年ほど前からではじめたようであるが、当時は品質をひどく低下させるほどの発生ではな

かつたし、戦時中は物資不足のため品質よりも量の需要が多かつたので市場価格にも影響がなかつた。ところが、終戦後には品質がやかましくなつてきた一方ヨクテン病の蔓延もひどくなつたので市場価格は落下し、和歌山や徳島産に比べると30%から50%の格安というひどいことにされて非常な打撃をうけるようになってしまつた。私は昭和24年に当地へ赴任したのであるが、この事実を知つて、何とかして防除法を確立し、本県の特産物として再起させたいと念願していた。た

第1表 部落におけるヨクテン病の薬剤防除試験成績

年別	薬 剤 名	濃 度	撒 布 時 期 (発病の一)				撒 布 回 数	発病率(%)	
			初期	中期	盛期	終期			
昭和 二七年	石灰硫黄合剤	0.5度	○	—	○	—	○	3	53.0
	〃	〃	○	—	○	—	○	2	54.3
	ダイセーソ	水1斗に12匁			○			1	73.0
	標準無撒布	—							100.0
昭和 二八年	石灰硫黄合剤	0.5度	○	—	○	—	○	4	8.9
	〃	〃	○	—	○	—	○	3	16.5
	〃	〃	○	—	○	—	○	2	22.0
	ダイセーソ	水1斗に12匁	○	—	○	—	○	3	12.2
	〃	〃		○	—	○		2	12.6
	標準無撒布	—							100.0
昭和 二九年	石灰硫黄合剤	0.5度	○	—	○	—	○	4	23.0
	〃	〃	○	—	○	—	○	3	21.0
	〃	〃	○	—	○	—	○	2	38.0
	ダイセーソ	水1斗に12匁	○	—	○	—	○	4	19.0
	〃	〃	○	—	○	—	○	3	5.6
	〃	〃	○	—	○	—	○	2	22.2
	〃	〃		○	—	○		2	22.3
	標準無撒布	—							100.0